ドールハウス

じかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドールハウス

【Ｎコード】
Ｎ２５４３Ｚ

【作者名】
じかん

【あらすじ】
帰宅したら玄関に段ボール箱が置いてあった。

仕事を終えて自宅に帰ると玄関の前に段ボール箱が置いてあった。
今朝出かける時にあれば気付くし実際無かった。箱は高さが7、８０センチぐらいで、幅も同じぐらいだ。そして明るい所でよく見るために、取りあえず段ボール箱を持ち上げて家の中に入ることにしたが、重量はちょっと重かった。玄関の幅ぎりぎりだったが、段ボール箱は普通の薄い茶色の物で、真新しかった。
箱には彼の姓名が印刷された紙が貼ってあり、この彼の家を施工したハウジング会社の会社名も書かれているが、宅配便などの送り状ではなかった。Ａ４の紙を横に半分切ったような大きさで、紙も普通のコピー用紙のようであり、彼の住所は書かれてはいない。と言うことは運んで来たのはハウジング会社の人だろうか、普通に考えるとそうなる。独身で一人暮らしの誰もいない玄関で思いを巡らした。
そこまで考えて箱を居間に運んでから、お風呂を済ませてすっきりした気分でミネラルウォーターを飲み、パジャマ姿で箱を開けた。
中には緩衝材が丁寧に詰まっており、厳重に保護されていたのは、ドールハウスだった。
ハウジング会社の人は、ドールハウスのプレゼントがあるとは言ってはいなかったが、サプライズなプレゼントなので何も言わなかったのかもしれない。

会社の同僚が家を建てて、家を持ってからは一味違った充実感に満ちた生活を送っているとよく口にしていた。そして彼にも家を持ってはどうかと頻りに勧めたが、彼が家を建てることに関して同僚に利害関係は存在しない。

３０代半ばでのマイホームで、自分の土地で建物はよくある３階建てだ。両親が存命だったら喜びも更なるものだったが、二人とも他界している。庭も少人数ならバーベキューぐらいは出来る広さがあり、同僚の言っていた通りで確かに満足感がある。

ドールハウスを改めて見ると実によく出来ていて、間取りは実際の彼の家と同じで、その他はインテリアなどの調度品が多少違うが当然だ。彼が住み始めてからはハウジング会社の人たちは来てはいないし、部屋の写真も撮られていないのだから。

携帯が電話の着信を告げたので見ると彼女からだった。

「もしもし、わたし。今、電話大丈夫かな」

「うん、大丈夫だよ」

「明後日の予定だけど変更は無いかしら」

「予定通りで問題ないね」

「わたし料理がんばるわ」

「ありがとう。楽しみにしているから」

「それでは、明後日に。お休みなさい」

「お休み」

電話を終えて彼は眠くなったのでベッドに潜り込み直に寝付いた。

彼女との約束の日の朝、昨日に部屋を少し片付けたが、起きてからも部屋をチェック

して問題は無さそうだ。それからシャワーを軽く浴びて彼女を迎えに駅まで行った。比較的に駅に近い所に住んでいるので楽だった。彼女は待ち合わせ時間の少し前に改札口を出て来て、トートバッグに食材を入れて肩に掛けている。

「バッグ、持つよ」

「ありがとう」

「髪切ったんだね」

「変じゃないかしら」

「ボブカット、よく似合っているよ」

「嬉しいな」

「ケーキ買って行こうか」

「わたしケーキ大好き」

駅の近くの洋菓子店でケーキを買い、手をつないで歩き温もりが通い合った。

家に着くと彼女が早速、料理の準備を始めた。

「コーヒーでも飲んで、少し休んでからにしたら」

彼女をいたわった。

「そうね、せっかくだから、コーヒーをいただくわ。ところで、このドールハウスはどうしたの。この間お邪魔した時には無かったけど」

彼女はソファーに座り尋ねたので、彼はコーヒーを淹れながら答えた。

「この家の施工会社からみたいなんだけど、一昨日、玄関の前に置いてあったんだよ」

彼の言葉を聞いて彼女は立ち上がり、ドールハウスに顔を近づけて感嘆の声を漏らした。

コーヒーをテーブルに置いて彼女に勧めてから、彼もひと口飲んだ。

「よく出来ているのね」
「そうなんだよ、本当によく出来ているけど、それで、施工会社にお礼の電話を掛けたんだけれども、ドールハウスのことは知らないって言っていたよ。何だろう」
「そうなんだ、おかしいわね。何かの手違いかしら」
「でも、僕の姓名の文字で印刷されているし、それに表札には苗字だけだからね」
二人はそれぞれ何か閃くものを期待してしばらく考えたが、これと言って何も浮かばなかった。
「そろそろ料理を始めるわね」
「手伝おうか」
「一人で大丈夫よ」
「うん、分かった」
彼女が手際よく料理を始めて、リズミカルな音と美味しそうな香りが、彼の食欲をくすぐった。パソコンで音楽を聴きながら読書をしていたら、程無く料理は出来たようだ。
「食事が出来たわ」
テーブルに料理が並んでいたが、カルボナーラに生ハムのサラダとオニオンスープだった。
「美味しそう」
「食べましょう」
二人はいただきますを小さく言って食べ始めた。
「旨い。料理も上手だね」
「ふふ、ありがとう」
黒目がちで穏やかな眼差しが、彼女の優しさに満ちた笑顔を更に

輝かせていた。
「ここに一緒に住まない。どうかな」
「それって、プロポーズとか言うものかしら」
「そうだね。少なくとも喧嘩を売っていないのは確かだよ」
彼女は俯いて肩が微かに震えた。
「お受けします」
顔を上げた彼女の瞳は潤んでいた。
「良かった。緊張したよ。ドキドキした。どうぞよろしくお願いします」
「こちらこそよろしくお願いします」
昼食の一時は喜び溢れる祝賀の場となった。
最後はデザートのケーキにコーヒーだ。食事を全て終えて片づけを二人で済ませてソファーに座り、コーヒーを飲みながら音楽を聴いて寛いでいた。
「このドールハウスだけど、外観の色を古風な感じに変えるつもりで、スプレーで大雑把に塗ろうと思って買ったんだ」
「わたしも塗っていい」
「もちろんいいよ。僕が模型を持つから、その袋の中に、スプレーと養生する物が入っているからそれを持ってね。庭に出てから始めよう」
彼がドールハウスも持ち、彼女もスプレーなどの入った袋を持ち後に続いた。庭に出てからほんの何歩か二人があるいたら、彼がつまずき転んでドールハウスが崩れ潰れてしまった。そしてほぼ同時に、二人で暮らすはずだった家も轟音を発して、伸びていた蛇腹が折りたたまれるようにぺしゃんこに潰れた。
二人とも幸い怪我はなくて、あっけにとられてその景色を眺めていた。

彼の家の周りには家が建っていないため、近所への被害も無かった。

「これって、夢かしら」

「そうならとても嬉しいね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2543z/

ドールハウス

2011年12月9日01時33分発行